

梯顧問がグラミー賞を受賞

2013年2月9日ロサンゼルスにて、米音楽界最高の栄誉であるグラミー賞のうち、音楽産業への貢献をたたえる各賞の授賞式が開催され、ローランドの創業者で当協会の顧問の梯郁太郎氏が「テクニカル賞」を受賞しました。これはシーケンシャルサーキット社の創業者のデブ・スミス氏との連名で受賞したもので、MIDIの制定に尽力し、MIDIがその後の音楽産業の発展に多大な功績があったと認められたものです。これは、MIDIを規格・管理する当協会にとっても大変喜ばしい出来事であり、現在取り組んでいるMIDI規格の国際標準化や中国におけるMIDI商標の問題にも大きく影響する出来事と考えています。去る3月22日に機会を頂き、河MIDI規格委員長と共にお話を伺ってまいりましたので紹介をさせていただきます。

「受賞の感想をお聞かせください。」

アメリカという国は、記念行事はQuarter（4分の1）で捉える国柄で、MIDI制定25年の時にノミネートの噂があったのは知っていたが、そのまま消えてしまった。その後何もなかったのが、30年を迎える今回受賞したことは驚きでもあり心から嬉しいと感じている。

「応用分野が広がった理由は？」

音楽そのものは時間の中で消費されてしまうものであり、アナログであるが、広く普及したのは、平均律及び楽譜（記譜法）の発明により音楽そのものを多くの人が共通認識できるようになったためだ。MIDI誕生当時、レコードからCDへというようなデジタル化の流れの中で「音楽」のデジタル記述方式は用意されていなかった。デジタルの世界で「MIDI」というフォーマットで音楽を残す、いいかえると「音楽そのものをデジタルで記述する」というコンセプトが優れていたのだと思う。それに加え、この規格を無償でオープンにしたことによるビジネスチャンスの拡大が大きい。私の果たした役割は規格の無償オープン化だ。

当初は、規格の統一化についても数年間なかなか進まなかった。しかし、日本のメーカーのMIDIを採用した商品がヒットすることにより一気に進むようになった。名称も当初考えていたのはUMI（Universal Musical Interface）日本語での拡がるという語感（海）を意識したものであったが、英語での響きを考慮しデブ・スミス氏の提案によりDigitalという言葉を含めてMIDI（Musical Instrument Digital Interface）と決定した。規格が「音楽そのものの記述」で「無償且つオープン」であることにより、電子楽器及び関連機器にとどまらず音楽ビジネスに関わる人達の事業チャンスが拡大することとなった。その結果、「業務用通信カラオケ」や携帯電話における「着信メロディー」、「照明での利用」といったMIDIの応用による事業が進展した。

「楽譜」は、それ自体が単純化され、まとまっているのと同様に「MIDI」は必要な要素以外はそぎ落としてシンプルにしており、「楽譜」にとっても近い状態でデジタル伝送にするものだ。

共通の規格を制定する際に、何が必要要素なのか、どの段階でインターフェイスとして区切るか？ここが、悩ましくもあり、もっとも重要なポイントだ。MIDIは、若干の改定はあったものの「MIDI規格」そのものは変化していないことが重要であった。オープンにしたからには、後戻りできないわけで、MIDIはMIDIとして存続し、他の要素が入るのであればそれは違う規格にすればいいことだ。

「MIDIが音楽に与えた影響は？」

MIDIと言うフォーマットはコンピュータとの相性がとてもいい。それが、コンピュータの発展と共に電子音楽の発展に寄与した。最初は、シンセサイザーとシーケンサー、シンセサイザー同士で繋いでいたものがコンピュータとの相性の良さが電子音楽の進化・発展に貢献をした。福田勲氏がシンセサイザー音楽を始めた頃はアナログでやっておられた。これは接続が非常に難しかったが、MIDIの登場に

より、この煩わしさから解放され発展性のあるシステムが出来上がった。

MIDIと言うフォーマットがコンピュータへのドアを開いたといえる。

今はネットワークの時代に入っているが、USBや伝送系（インターネットなど）を用い、MIDIのコンセプトを崩さずに、従来のコネクタの煩わしさから解放したのはいい方向であり、今後も音楽制作にとりMIDIの重要な役割は変わらない。MIDIを一言、日本語でいうと「縁の下の力持ち」ということになる。表にでてきてワーワーと言うものではない。目には見えないが、いろいろなところで役にたっている。如何に、応用を拡げていくかということだ。

「これからのMIDIの役割はどのように進化？」

繰り返しになるが、MIDIは、コンピュータにおける「音楽の共通言語」だ。楽譜がその発明から数世紀に亘り（今現在も）その役割を果たしているのと同様に、今後もその役割は変わらない。ただ、「縁の下の力持ち」であるので、どれだけ多くの人に、どのように使われていくかにかかってくる。若い人達に望むことは、音楽を身につけるには、しっかりと練習をしましょうということだ。音楽をマスターするということは言語を学ぶのと似ているところがある。MIDIについて言えば、MIDIは音楽ジャンルを選ばずに表現できるフォーマットなので、ちゃんと音楽を目指す人にはその理屈を身につけて欲しい。理屈が分かっていないと使えないので、使えるような勉強が必要だ。そうした意味において「MIDI検定」については更に拡大を目指して欲しい。

「AMEI会員に一言お願いいたします。」

既にRP/CA化されているMIDI Visual Controlによる映像コントロールの使い方による新たな表現の為の機器開発であるとか、コンテンツの世界でいえばゲーム等における音楽/映像をリンクした

開発であるとかMIDIの応用分野でのビジネスチャンスは広がっていると思う。皆さんで知恵を絞り新たなビジネスが創出されることを期待する。

